様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２４日現在

機関番号：10101
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：21730613
研究課題名（和文）物語論的アプローチからの識字教育論の構築

研究課題名（英文）Literacy learning theory from a point of narrative approach

研究代表者
添田　祥史（SOEDA YOSHIFUMI）
北海道教育大学・教育学部・講師
研究者番号：80531087

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的は、物語論的観点から識字教育論を構築していくことにある。継続的な参加的研究を通して申請者は、識字と「解放」とをきり結んで捉える従来の識字教育論では、正当に評価されない学習のあり方や学習者がいることを目の当たりにしてきた。理念に先立ち生身の人の思いや生き様から識字という営みを捉え直す必要があると考える。
そこで、申請者は物語論に着目する。物語論とは、人びとの間で構成される物語としてのナラティヴを読み解くことで、彼らに現前している世界を理解し、その世界への関与を可能にする方法論である。そうした視点から、フィールド調査とアクションリサーチを行い、識字実践を「自己とコミュニティの新たな物語の再構築過程」として再定義した。識字学習に対して多様な向き合い方を許容できる識字教育論の構築に向けた基礎的な作業を終えることができた。

研究成果の概要（英文）：
This study focuses on the literacy learning theory from a point of narrative approach theory. The authors have observed some learners who could not be accepted properly by teachers in the manner of traditional literacy learning theory which insists that there are strong connection between ″literacy learning″ and “Liberation”. Before we argue “right learners” or “right practice” based on theory, we must start to grasp what they wish in literacy practice, how they live everyday life. Thus I try to propose new literacy theory for them. Literacy leaning is that the process re-constructing self and community. This definition is more suitable human diversity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：識字教育、成人基礎教育
科研費の分科・細目：教育学・社会教育
キーワード：識字教育、成人基礎教育、ナラティヴ、物語、ライフストーリー

１．研究の開始当初の背景

成人の識字問題は過去のものではない。生涯学習社会を標榜するわが国においても、読み書きに不自由している人は存在する。

国内の識字問題は、1990 年の国連「国際識字 10 年」を契機に社会的な関心を集め、実践的にも研究的にも大きな進展を遂げた。なかでも最大の功績は、識字を単なる読み書きの機械的な習得プロセスとして捉えるのではなく、「意識化」（パウロ・フレイレ）を通した「解放」への対話的な学習活動だという認識が定着したことであろう。

2013 年は、二度目の「国際識字 10 年」の最終年であった。実践は地道に継続しており、より一層の研究の進展が望まれながらも、それに取り組む研究者は少ない。

申請者は、2004 年７月より民設民営の識字教室「青春学校」において、スタッフとしての役割と責任を果たしながらの参加的研究を行ってきた。また、並行して全国の先進的な事例への訪問調査も行ってきた。

そこで得た実感は、今日、「解放の識字論」を実践しようとするのは事の外難しいということであった。「解放の識字論」が想定してきた「意識化」し、行動変革していく学習者像とは相容れない多様な学習者の姿を目の当たりにしてきた。

「書くことにこだわると出口がなくなる」―ある公立夜間中学教諭のこの言葉に、現場の「今」が象徴されている。十年以上、熱心に識字学習に臨みながらも、ひらがな・片仮名をマスターできない人は少なくない。そうした学習者にとっては、人間解放につながるはずの識字が、自己の能力や加齢への不安に結びついてしまうのである。

なぜ、こうした実態が見落とされてきたのか。それは、学習者理解の前提に、「解放の識字論」を下敷きとしたあるべき学習者像が想定されていたことによると思われる。学習者への聞き取り調査も、こうした前提のもとで事例選定がなされるので、理念に適合しない「識字教室には遊びに来る」と公言するような学習者の「声」が取り上げられることはほとんどなかったのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、物語論的観点から識字教育論を構築していくことにある。継続的な参加的研究を通して申請者は、識字と「解放」とをきり結んで捉える従来の識字教育論では、正当に評価されない学習のあり方や学習者がいることを目の当たりにしてきた。理念に先立ち生身の人の思いや生き様から識字という営みを捉え直す必要があると考える。

そこで、申請者は物語論に着目する。物語論とは、人びとの間で構成される物語としてのナラティヴを読み解くことで、彼らに現前している世界を理解し、その世界への関与を可能にする方法論である。この方法論で識字学習者の語りを読み解いていくことで、新たな学習者理解が拓けてくるだろう。また、識字実践を「自己とコミュニティの新たな物語の再構築過程」として捉えることで、「解放の識字論」との理論的接合も可能になる。そして、なによりも、高齢化が進む識字の現場において、「書くことにこだわると出口が見えなくなる」という切実かつ喫緊の課題を解決するな実践的切り口を提供することができるだろう。

申請者は、「解放の識字論」のエッセンスを継承しつつ、問題点を解消する鍵として、物語論に着目している。申請者は、「解放の識字論」とは、「自己とコミュニティの物語の再構築過程」であったと読み換え、この新たなストーリーの構築過程自体を学習として捉える視座を提唱した。社会学者の桜井厚や生涯発達心理学のやまだようこの議論を援用しながら、「解放の識字論」を再定義することを試みる。

３．研究の方法

本研究は、４ヶ年計画で進められる。最大の特徴は、理論研究と事例研究との往還を重視した現場と共同しての知の生成方法にある。さらに、理論が示されるだけでは、日本の識字問題の解決にはならない。識字の現場に携わる人々に研究成果が活用してもらえるようにするまでを最終的な目的とする。

１年目に国内外の関連する知見を収集し、暫定的な理論を提示する。それを受けて２、３年目は事例分析を行う。以上をふまえて、４年目は当初の理論を修正し、最終版として提出し、成果を学界・現場各々に伝わるように発信する。

データ収集の方法と調査対象は次の２つを柱に考えている。

一つは、識字実践のフィールド調査である。申請者は、2004 年６月より青春学校（福岡県北九州市）のスタッフとしての責任と役割を果たしながらのフィールド調査を行ってきた。並行して、全国の先駆的実践に対しての訪問調査を実施してきた。継続して訪問調査を実施し、参与観察及びインタビューのデータを蓄積していく。

二つには、アクション・リサーチである。申請者は、2008 年赴任後、地元の市民と共同して学び直しを支援する市民活動を立ち上げ、運営に携わっている。活動に身を置きながら、現場の最前線から日本の識字が抱える「今」の問題を整理し、それを乗り越えるための視座と方法を探っていく。

４．研究成果

（１）識字教育の理論研究

まず、物語論は、新たな学習者理解を促す。「識字教室には遊びに来る」という語りを分析する際、そう語らせしめたものは何か、そう語ることで何が生じるのか、という点に着目すると、この語りは、思うにままならない識字習得からくる焦りや不安や諦めと同居しながら、識字教室に参加し続けるための戦略的な語りであることに気づく。

さらに、物語論的視座は、識字教育方法論の発展にも寄与する。識字教育が差別・抑圧構造の再生産装置になり下がらないためには、「解放の識字論」は今日なお重要である。しかし、「解放の識字論」は、絶対的・客観的真理にもとづく社会像や人間像を想定しており、その意味で啓蒙主義的側面を内包していた。申請者は、「解放の識字論」のエッセンスを継承しつつ、問題点を解消する鍵として、物語論に着目している。

以上をふまえて、申請者は物語論の知見を援用して、識字実践を次のように再定義した。

識字教室とは、歴史的・文化的背景の異なる者同士が集い、否定的なストーリーに抗する新たなストーリーを共同構築していく場として位置づけることができる（下図）。

新しいストーリーの源泉として抑圧された「声」が響きあう場の重要性について、社会学や政治学における「新しい親密圏」の議論を援用しつつ、識字実践によって「私たち」という主体が生成され、社会を変革していく道筋を示した。

研究成果は、ライフストーリー研究に関する国際学術交流会（於：神戸大学）や「これからの識字教育研究・実践の展望を探る」（於：大阪市立大学梅田サテライト）は、この数年間で識字教育をテーマにした唯一の集団的な研究討議の場であった。現場関係者も多く参加したこの集会で申請者は招待講演として、本科研の研究成果を報告した。報告後の意見交換では、研究者もさることながら現場関係者から高い支持を得た。

（２）スタッフ側の学びに関する研究

識字教育に関わる支援者の学びについて、インタビュー調査をもとに考察した。

第一に、北九州市の識字教室「青春学校」に参加する大学生スタッフの変容過程を描いた。当初は、それほど高い目的意識をもって参加していたわけではないが、お互いのかけがえのなさを体感しあう関係が学習者との間で深めるにつれて、相手に寄り添おうとすることで、ふるまいを変容させ、そうしたふるまいを蓄積していくことで自己を変容させていく。

第二に、物語論の視座からスタッフが実践を語ることの意味を探求した。社会教育の研究と実践では、スタッフ相互に実践を語り合い交流させることを大事にしてきた。そうすることで、新参のスタッフは、先輩のスタッフの語りを身につけていく過程で、学習者理解や実践上の理念を継承していく。

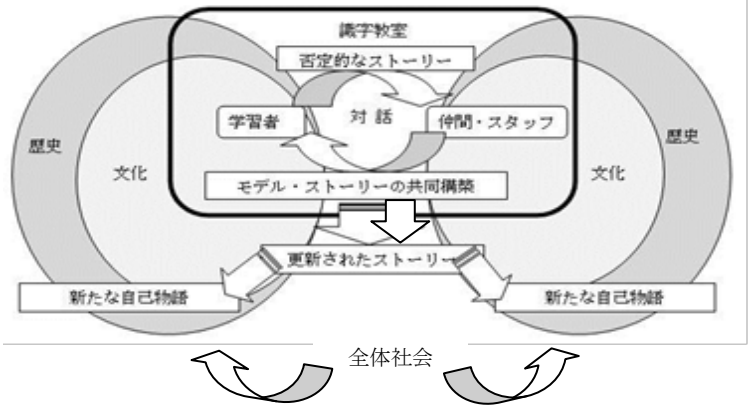
（３）アクション・リサーチの成果

釧路自主夜間中学「くるかい」を地元住民と協働して設立し、運営に携わりながら研究成果の発信に努めた。

第一に、教育・福祉・労働にまたがる領域として成人基礎教育を位置づけるべく、生活福祉行政や首長部局の経済部との連携した運営を構築することができた。これは、日本においては先駆的な取り組みであり、先進事例として広く学会等で紹介している。

第二に、学び直しの現場での人間回復のドラマについて分析的に記述していく研究を蓄積できた。回復のプロセスやそれが生じる条件として、「する」よりも「いる」に価値が置かれていること、「居方の質的変化」へのスタッフの感受性の高まり等を指摘した。

こうした成果をひろく社会に発信すべく、地元のメディア（ラジオ、新聞、テレビニュース）への出演や講演活動を積極的に行った。また、大学等で使用する社会教育に関するテキストや社会教育に関する事典に関連項目を執筆した。



５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
（１）添田祥史、社会教育職員が実践を語ることの意味―ナラティヴ・アプローチから― 、月刊社会教育、査読無、2012 年、第 678 号、21-25 頁
（２）添田祥史、釧路市における格差・貧困問題と成人基礎教育―釧路自主夜間中学「くるかい」の現場から― 、教育の研究と実践、北海道教育学会、2012 年、査読無、第７巻、15-24 頁
（３）添田祥史、日本における識字実践・研究の潮流―東アジアと夜間中学増設運動―、東アジア社会教育研究、東京・沖縄・東アジア社会教育研究会、2011 年、査読有、第 16 号、62-72 頁
（４）成澤弘明・添田祥史、自己肯定感の獲得プロセスに関する一考察―冬月荘「Ｚっとスクラム」を事例に― 、北海道教育大学紀要教育科学編 、2011 年、査読有、第 61 号第２巻、49-60 頁
（５）SOEDA Yoshifumi、Construction d'une education pour adultes analphabetes par l'approche de l'histoire narrative、Hemins de frmation、第 15 号、査読有、2010 年 81-85 頁、ISBN978-2-36085-007-5
（６）添田祥史、学習を権利で保障するということ―釧路自主夜間中学『くるかい』の現場から―、社会教育・生涯学習研究所年報 2010、査読無、2010 年、第６号、53-63 頁
（７）添田祥史、大学生ボランティアにとっての識字教室―『青春学校』における生の支えあい―、月刊社会教育、査読無、2009 年、第 649 号、74-79 頁

〔学会発表〕（計１１件）
（１）添田祥史、これからの識字教育研究・実践を考える、大阪市立大学博士課程院生研究支援プログラム、2012 年９月８日、大阪市立大学梅田サテライト
（２）添田祥史、釧路自主夜間中学「くるかい」の活動―格差・貧困問題と成人基礎教育―、2012 年９月７日、若年リテラシー研究会、部落解放・人権問題研究所
（３）添田祥史、生活困窮者の自立を支える成人基礎教育の必要性、子ども家庭福祉研究講演会、2012 年２月 14 日、母子愛育会日本子ども家庭総合研究所
（４）添田祥史、自主夜間中学校における大人と子どもの成長、日本臨床教育学会、シンポジウム招待講演、2011 年 10 月２日、北海道教育大学札幌校
（５）添田祥史、社会教育学研究としての識字教育研究の課題と方法、日本社会教育学会、自由研究発表、2011 年９月 17 日、日本女子大学
（６）添田祥史、ナラティヴに着目した成人基礎教育実践―夜間中学校元教諭・見城慶和「生きる力を励ます文法」―、日本社会教育学会、ラウンドテーブル報告、2010 年９月 20 日、神戸大学
（７）添田祥史、親密圏としての識字教室―「解放の識字論」の再構築にむけて―、福岡・社会教育研究ネットワーク、2010 年９月７日、九州大学
（８）添田祥史、釧路自主夜間中学「くるかい」の活動、教育科学研究会全国大会道民教合同研究集会釧路大会、2010 年８月５日、北海道釧路市
（９）添田祥史、北海道における夜間中学校の実践―釧路自主夜間中学「くるかい」の活動―、社会教育・生涯学習研究所「地域セミナー」 、2010 年３月 27 日、北海道札幌市
(10) 添田祥史、物語論的アプローチからの識字教育論構築の試み、ライフストーリーを介した日本の研究者・実践者、院生・学生とピノー先生の交流討論会、2010 年１月 26 日、神戸大学
(11) 添田祥史、成人基礎教育保障にむけたアクション・リサーチ経過報告―釧路自主夜間中学「くるかい」の目的と準備過程―、日本社会教育学会、自由研究発表、2009 年９月 18 日、大東文化大学

〔図書〕（計２件）
（１）松田武雄編著、現代の社会教育と生涯学習、九州大学出版会、総頁数 231 頁、（第４章「現代の貧困と成人基礎教育」執筆担当、79-99 頁、2013 年
（２）社会教育・生涯学習事典編集委員会、社会教育・生涯学習事典、朝倉書店、総頁数 674 頁（「基礎教育」の項目執筆、90-91 頁）、2012 年

６．研究組織
(1)研究代表者　添田　祥史
（SOEDA　YOSHIFUMI）
北海道教育大学・教育学部・講師
研究者番号：80531087

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし